

好機逃さず得点重ねる

【評】城南が好機で打線が畳み掛けて大会屈指の右腕を攻略。中盤以降、主導権を握ると九回の大量得点で試合を決めた。打線は9安打で8得点と効率的いい攻めをみせた。

四回、死球と敵失で好機を広げ、奥浦が右前にチーム初安打を打ち先制。五回は2死走者なしから多田、出口、松原、竹内の4連続長短打で2点を追加した。

1点差に迫られた直後の六回、岩本の二塁打を足掛かりに柳川の中前通時打で再度、チームに勢いを呼び込んだ。1点差で迎えた九回には暴投と竹内の左翼席への3点本塁打で試合を決めた。

先発の竹内は粘りの投球。11安打を浴びながらもテンポ良く打たせて取る持ち味を発揮。五回以降は変化球を低めに集め、要所を抑えて完投した。竹内の投打にわたる活躍で初陣を飾った。

▽1回戦(第1試合)

城南(徳島)	0	0	0	1	2	1	0	0	4	8
報徳学園(兵庫)	0	0	0	0	2	0	1	0	2	5

課題見つかった
報徳学園・永田裕治監督の話 心配していたことが全部出た。守備力や(バットが)振れないことといった課題がものすごく見つかった。

初陣と思えない集中力



創部13年での初陣とは思えない集中力で強敵を下した。部員26人の公立校が普段通りの4強入りした部員91人の強豪攻撃野球で挑み、昨夏、甲子園校を相手に堂々とした戦いぶり

だった。森監督は破壊力のある打線にスパイスを加えた。「ガチガチになるから最初から動かした」。試合巧者の相手のお株を奪うかのようにエンドランで守りを翻弄(ほんろう)した。

好投手・田村を見事に攻略した。田村はこの日の最速が147キロで、切れのあるスライタールを揮う。各打者は捕手寄りに立ち、低めと外の変化球を捨てた。そのため「変化球を見送られ、自信のある直球をこごとく打ち返された」(田村)。四く六回は3イニング連続得点。走者を出した5回のうち4回で得点するなどそつがなかった。

普段の練習で使用できるグラウンドは手狭で、打撃練習はバックネットに向かって打つため飛距離がつかめない。しかしデメリットと思わなかった26人はコンパクトなスイングを習得。放った9安打のうち7本がセンターから逆方向だ。

城南は昨春、甲子園で強豪・大阪桐蔭の試合を観戦した。多田は「身震いした。ここで試合がしたいと思った」と、当時の全部員の気持ちを代弁する。森監督も同じで「選手をここに連れてきたかった」。決意を固めた選手たちは昨秋の県大会で優勝し、21世紀枠選出につなげた。

2回戦は部員66人の強豪私立・鹿児島実。出口主将は「自分たちでもやれることが十分に分かった」と手心えを口にする。26人の「春ドラマ」はまだまた続きそうだ。(阿部研一)

9回、城南2死一、二塁、竹内が左越えに6ランを放つ。捕手佐渡友一、甲子園